

パネルディスカッションでの意見要約

1. 遭難が増加している原因として考えられること

- ・ 登山者の高齢化。60歳以上の遭難件数が多いことからそのことが伺える。
- ・ 雑誌やテレビなどビジュアルな情報を優先したマスコミの取り扱い方が、若者を中心に登山愛好者を安易な登山へ誘導している面がある。
- ・ 過去の遭難事例から学ぶことをしなくなった。
- ・ インターネットの普及で、だれでも登山の情報を簡単に入手できるようになり、手軽に山登りができるようになった。インターネットが普及する以前は、山の情報や登山知識はごく一部の登山経験のある人達からしか得ることができず、誰でも手軽にできるものではなく、安易な登山が少なかった。
- ・ 我々の登山のイメージはアルパインクライミングであり、純粋なスポーツというより冒険的な要素が強い遊びだと思っていたが、昨今はフリークライミングだけでなく、登山界全体のスポーツ化が進んでおり、登山者自身の遭難に対する意識もかわってきている。またアルパインクライミングからスポーツクライミングへの傾斜により、アルパインクライミングのスキルを持った指導者も減少しており現場での安全技術の指導や伝承が難しくなってきている。
- ・ 山口県の山屋は雪の事を知らなすぎる。これは地理的な要素が大きく影響しているのではないかと。県内には高い山が無く、中国山地の最高峰の大山でも2千メートルに満たないため3千メートル級の冬山の厳しさを経験できない。3千メートル級の山のある中部山岳地帯は距離的に遠く、サラリーマンには年に1~2回行くのが精一杯。必然的に雪山経験が不足して、3千メートル級の冬山での天候や雪に対する認識の甘さを生んでいる。

2. 遭難防止するにはどのようにすればよいか。

- ・ 登山は、自らが危険な場所に入っていく危険な行為で、不確定要素が多く、遭難をなくすことは容易ではないと感じている。まず出来るところから取り組んで行く。安全意識を高める地道な活動を継続するしかない。具体的には、指導的な立場を担う会員を中心に安全登山に関連する講習会を積極的にできれば半強制的に受講させる。また、周囲の人や後進に、今回の遭難事故を例に、遭難で肉親や仲間を失うことの悲しさを伝えていく。今回のような研修会や講習会を意識的に開催して、遭難について考える機会を創出し、積極的に取り組む努力を続けていくことだと考える。

3. 参加者の意見

- ・ 山登りは、お互いがわかりあえた仲間意識を持てるメンバーで自分たちで計画を立てて実行するものであり、人の企画したツアーに、その日初めて駅前に集合したにわか作りのグループですのようなものではない。そのような登り方はしないこと。
- ・ 「行けるところまで行ってみよう」という行き当たりばったりの登り方をしない。
- ・ 雪崩遭難対策で、ビーコンを携行していれば雪崩遭難事故を防げるような錯覚があるように感じるが、改める必要がある。ビーコンは万能ではない。事故が起こった時、捜索する人や、残された遺族への思いやりとして携行することは必要。

4. 結論

- ・ これまで山口県山岳連盟としては、加盟団体会員を対象にした登山講習会を夏と冬に各一回、クライミングレスキュー講習会を一回、安全登山のための活動を継続的に行ってきたが、遭難防止というよりは遭難が起こった時の対応方法の学習との傾向が強く、参加者も少なかった。昨年からは、遭難防止の視点から、一般にも対象枠を広げて安全登山講習会を開催するなど取り組みをすすめているが、今日は4月の雪崩遭難事故をきっかけに、改めて遭難防止について考えてみた。一般企業活動においても安全は最優先事項であり、安全会議などの取り組みが行われている。登山においても、安全に対する意識を高め、安全を重視した取り組みを行う必要があると考える。本日の研修会の参加者数の少なさや、討論会での意見を総合的に考えると、岳連加盟団体会員の安全意識の低さという点に行きつくように考える。今後も遭難を防止するためには安全意識をより高めるための必要がありそのための活動を継続して行きたい。